

平成二十五年 入学試験問題

国語 (理系)

一〇〇点満点

※配点は、学生募集要項に記載のとおり。▽

(注意)

- 一、問題冊子および解答冊子は係員の指示があるまで開かないこと。
- 二、問題冊子は表紙のほかに12ページ、解答冊子は表紙のほかに12ページある(うち7ページは下書き用)。
- 三、問題は全部で3題ある(1ページから12ページ)。
- 四、試験開始後、解答冊子の表紙所定欄に学部名・受験番号・氏名をはっきり記入すること。表紙には、これら以外のことを書いてはならない。
- 五、解答はすべて解答冊子の指定された箇所に記入すること。
- 六、解答に関係のないことを書いた答案は無効にすることがある。
- 七、解答冊子は、どのページも切り離してはならない。
- 八、問題冊子は持ち帰ってもよいが、解答冊子は持ち帰ってはならない。

次の文を読んで、後の問に答えよ。(四〇点)

当時のそんな精神状態を思い浮かべていると、それにたいし「もの」によって屹然と対峙しているような一枚の絵が現われてくる。ニューヨーク、メトロポリタン美術館にある絵である。十年前これを見たとき、わたしはほぼ一年の西欧滞在の終りにあり、現実の西欧市民階級というものをいよいよ知らされて、少年期以来続いた「西洋」というイリュージョンに最後のとどめをさされて帰るところであった。絵はまるでわたしの四十年の生に冷水を浴びせるように作用した。

なんのへんてつもない麦刈りの絵である。

画面中央を黄褐色の熟麦の巨大なマツスが見る者を圧するようにひろがり、右手にいま労働の中休みの一団が大きな梨の木の下に憩い、麦畑の色調と均斉を保っている。麦畑の黄は牧草地や林や道路の線を越えて向うの丘のそれに受け継がれ、さらに先には教会の尖塔を聳えさせた町、海へと流れる。右手は聳上った斜面を木々が限り、青屋根の教会が木々のあいだにのぞく。ここにいるのも、あの特徴あるブリュエーゲルの農民たち、逞しくて無様で愛嬌のある、まるまっこのいからだつきの連中だ。それが食べ飲み休んでいる。

樹の真下に両足をだらんとのぼして眠りかけている男の姿態は、「怠け者の天国」の農民を思い出させるし、画面にみなぎる労働のはげしさと休息の、途さの対比は、晩年のあの比類ない版画「夏」の気分に通じる。

はげしい絵である。大地はその豊饒な生産力に見合うだけのだいしようを農民の労働に要求し、労働のはげしさはその逞しい肉体や疲労やむさぼるような飲食や、無知と愚かしさとそやとを必然的につくり出したように見える。しかしここには人間が自然の一部として生き、自然のゆたかな恩寵とその反面であるあらゆる生命力とに真向から取組んで、結びつき、充足しきつている姿がある。画家の目はたしかに何ものをも見逃していない、農民の放埒も貪りくらう食欲も、ぐったりと疲れ切つてあがつてくるさまも、かれらの肉体が示すすべての特色も、だがそれをもふくめて、この地上にあるがままの姿において、人間はなんと大地と深く結びつき、生命をともし、そして全体の生命を形作っていることだろう。人間は愚かなまま、

無様なまま、あるがままにその全存在を肯定されて、大自然の中にいるのだった。

絵は、わたしに一九四四年六月、農村地帯へ一週間の勤労働員が行われたときのことを思い出させた。われわれは農家に分宿し、その家の麦刈りを手伝った。麦刈りがこれほどきついのはけしい労働だとは、だれひとり予想もしていなかった。年寄りの農民が熟練したたしかな速度ですつすつと進んでいくのに、若い学生たちはだれもそれについていけなかった。腰が耐えがたく痛む。麦の穂が陽に灼かれ汗にぬれた皮膚を刺す。われわれは三日日には、朝、足腰が立たぬくらい疲労しつくしていた。だが、あのととき陽に灼かれながら成熟した麦というものをこの肉体の労苦を通して相手にした経験は、いまもわたしのなかに、まもがいのない生命の充実の感じをともなつて残っているような気がする。その感覚が、あの「麦刈り」の、何も彼も放りだしてでんと休んでいる男や女に共感をよせる。あれは十九歳の自分たちの姿でもあった。

マディソン・スクウェアガーデンのわたしの空のまん前には、道路を距てて、建物を取壊した跡地が駐車場になっていた。取壊しであらわになつた壁いつばいに、黄と緑と赤とでサイケデリックな模様を描いてあり、駐車場には車が前後二十センチくらいの間隔でびっしり詰めこまれていた。若い男が一人、次から次へ前の車を出しては別の列につめかえ、あのなんとかわず四階の窓で感嘆の声をあげずにいられた。男の運転技術は神業のようだった。しかし、それと同時に、それにもかかわらず彼の神技的労働を、おそろしくむだな、ばかばかしいものに感じないわけにいかなかった。これが一体労働と言えるだろうか、と。

すると、わたしの理想はまたあの黄褐色の絵に帰って行く、あそこにはなにか労働以上のものがあつたわけだ、と。労働とそのほうしゅう、所有関係を越えるなにか——むろんそれは自然のなかの人間の生に關わるもの——があつて、だから画家はああいう白足しきつた姿を描いたのだろうか、と。画家はほとんどこう言っているように見える、絵画芸術は現実のあるがままの人間の生を正しく描けさえすればそれでいいのだ、絵の価値をきめるのはそこに描かれたものの眞実性だ、それは描かれたものが決めるだろう、愚かな者も、醜い者も、ずるい者も、存在はすべてあるがままに全肯定されているではないか、そ

れを正しく描き出す以外に芸術の用はない、と。事実プリューゲルは、いわゆる美のための美を追求する絵など、一枚も描かなかつた。

この考えはわたしを愕然とさせた。それはほとんど「言語と精神」の世界の自律性そのものを否認するように聞えたからである。^{*}「微笑しつゝ無意識な無言の人生に君臨している、精神と言語の力（一）などいふもつたというのだろうか。絵の世界と同じく、言葉の世界も、書かれた現実自体のがわの批評によつて初めてその規律と価値を得ることができるのであつて、決してその逆、つまり作品の自律的価値のためにはないのではないか。すること、とわたしはまた始まつた競馬場のゲームめいた空しい入替え作業に目をやりながら思う、言葉や形象や色彩や音の世界が第二の現実となることはありえないのか、それらはずねに一義的に生の現実のなかからだけその生命と存在理由を獲得することができるともあつて、言葉の伝統だけで成立つ世界、絵画作品の歴史だけで成立つ世界などありえないのか、と。すると作品とは、体現実にたいしてどういふものとしてあるのだろうか。

ぎりぎりの最後に現われる現実とは何ぞかだけかもしれんな、とわたしは思った。鉄の手でひつ掴（二）まえるようにして投込まれた兵營での生存の感じが思い出された。「三友知り」の絵はしかし現実の模写ではない。いかにもリアルであるが、これは写生的リアリズムではなくて、彼が民衆の肉体と精神においてこれぞ真実の姿と見極めた精髓の形象化、従つて様式化されたリアリズム、いわば彼の見た生の真相の表現といったものだろう。彼の絵のなかには民衆の生存の真相が表現されきつてゐるが、それを表現したのはプリューゲルという画家だ。あれは、ちょうどシエイクスピアの世界が民衆の生の真相にたいし完全に開かれていながら、彼自身の精神によつて統一されているように、プリューゲルという思想によつてだけ統一されている。あそこに描かれた人物たちは、個体でありながら個を超えたもの、いわば個体の、個体の普遍的な表現となつてゐる。ちょうど彼の自然が写生そのものでなく、普遍的な世界風景であるように。するとあの絵は現実にたいしてどういふ関わりで存仕しているのだろうか。

抽象的な世界に逃れなければ生きてこられなかつたのだろうか、という反省が初めて浮かんたのはそのときである。この画

家は現実そのものをしっかりとその手で握っていた。彼の天才的な形象把持能力のなかで、岩塊や樹木や巨々と同じように、生きるすべての人間はおどろくべき鮮やかさでつねに彼のなかにひしめき、動き、生き、表現を求め、そして画家にとってはそれを画面の上に再創造することが彼自身の生となったことであろう。しかし拍象的な観念世界の生は、「^{*}暗い花ざかりの森」はうんでも、^(C)そういう現象との幸福な関係はうみえなかつた。

(中野孝次『プリューゲルへの旅』より。一部省略)

注(＊)

当時のそんな精神状態は一九四四年、十九歳の筆者は、戦時下の現実から目をそむけるために、西洋的教養主義を志向し、抽象的観念性を養っていた。

マッスル絵画において、「画面の中の相当量の色や光や影などのまとまりのこと。

プリューゲルは十六世紀フランドル派最大の画家。農民を多く描いたため「農民プリューゲル」の異名がある。『麦刈り』

「惹け者の大団」、『夏』などはその作品である。

サイケデリック・幻覚状態を想起させる極彩色の絵やデザインや音楽を形容することば。

「微笑しつつ……」は十九歳の筆者が絶望的な熱い思い入れで読んだトーマス・マンの小説『トニオ・クレイゲル』からの引用。

Existenzドイツ語で、生存、生活、現実的・個別的存在の意。

「暗い花ざかりの森」は野間宏の小説『暗い絵』による。この表現は、一九三七年、左翼運動弾圧下にあつた青年たちの非現実的で観念的な生き方を表している。

問一 傍線部(ア) (オ)のひらがなを漢字に改めよ。

問二 傍線部(A)はどのようなことを言っているのか、説明せよ。

問三 傍線部(B)のように筆者が感じたのはなぜか、説明せよ。

問四 傍線部(C)について、プリューゲルにおける「現実との幸福な関係」とはどのようなものか、説明せよ。

白
紙

次の文を読んで、後の問に答えよ。(三〇点)

たとえば、夜道を歩いていると前方に巨大な影が動いていたとする。よく見ると柳が風に揺れているのである。しかしそれは単なる柳というより、何か生き物のような不気味さを感じさせる。私はその物の辞典上の名前が「柳」であることを知っている。しかしそれを「柳がある」と述べるだけでは自分の今の「感じ」にたらずして何やら不正確に思う。植物を分類するためなら、私はためらいなく「柳」と言うだろう。しかしいま私に不気味な感じを与えているこのもののありようは、それでは伝えられない。そこで適切な言葉を探したあげく、(あまり適切ではないが)「お化けのような柳がある」とか「そこにお化けがいる」とか言うことになる。つまり「柳」を「お化け」に見立てるわけである。この例から何が見てとれるだろうか。

第一に、「見立て」は言葉になって初めて生じたものであつて、私にもともとあつたのは言葉以前のある不気味な存在だ、ということである。「見立て」は言語化のための苦しまぎれの方便なのである。ということは、「見立て」の言葉が語られているとき、私は(柳)を(お化け)と間違えているわけではなく、むしろ違うことを承知で(柳)を(お化け)として見るふりをしていのである。というのち、「お化け」という言葉が、私の見ているものを言い表すのに最も正確だと思えたからである。だから見立ては、私の経験の中身ではなく、言語表現のための演技なのである。

第二に、このような「見立て」としての言表は、既成の言語規則に対する不慣れ、少なくともその不便の証拠である。そしてこの場合言語規則とは、ある物についていかなる名称を与えるかという規則のことであるから、認識の規則と言つて差し支えない。規則に従えば、私は(それを)「柳」と種しゆの名称で呼ぶことができる。その上位クラス(類)である「木」と呼ぶこともできる。もちろん「植物」と呼ぶこともできる。これは博物学的な分類基準によるものである。(その他、様態や用途に応じて「植木」とか「並木」とかいろいろあるだろう。)ただし「猫」とか「動物」と言えば、これは「カテゴリー間違い」とされる。つまり物の分類が規則に外れているというわけである。確かに通常の会話でこの規則に従わなければ、私たちは大いに不便をきたすだろう。私

たちは、認識のため分類規則を共有しているからこそ、何事かの認識を言葉によって伝えうるのであって、これが混乱すれば「今朝霧が芽吹いてね」といったわけのわからない話になる。しかし、私がただ「柳がある」と言うことをためらったのは、この分類によって得られる認識は「言いたいこと」と関わりがないと思えたからである。私の話そうとした（私の経験は、ある異様なものが目の前に立ち現れたということであり、そのモノが博物学上いかなる分類をうけているかは、とりあえずはどうでもよいことなのである。この時「言いたいこと」は一種の認識であると言っても差し支えないであろうが、それは「柳であつて松ではない」といった種類の認識ではないのである。

従つて問題は分類の基準に関わるだろう。博物学的分類の基準は、物の客観的特徴である。厳密には遺伝子ということになるが、一応物の外形上ないし機能上の特徴による分類であると言つてよい。この分類に従つて語ることは、「何」について語っているかを容易に相手に了解させるので通常は便利である。しかし私が今話りたい（それは、どのような客観的特徴をもつかが問題なのではない。問題なのはそれが私に与えている主観的な印象であり、必要なのはそのような印象を持つものとしての（それを）を表す言葉である。「柳」という命名は（それに）博物学的な意味を与える。しかし私は（それに）別の分類基準による意味を与えたいと思う。私は（それ）に対し命名をやり直さなければならぬ。つまり、世の中の（もの）たちを不気味なものとそうでないものに分類しなおし、さまざまの（不気味なもの）（種）を集めたグループ（不気味なもの一般）（類）に名前を与えなければならぬのである。この新しい（類）についてはもちろん既成の名前はない。しかし、この（類）に含まれる他の（種）の中には既に名前のある場合がある。その一つが「お化け」である。そこでわたしは「お化け」という名前を借りてくる。つまり（それを）、新しい（類）の名前で呼ぶかわりに、「お化け」と呼ぶのである。

〔尼ヶ崎彬『日本のレトリック』より〕

問一 傍線部(1)において、「演技」とはどのようなことか、説明せよ。

問二 傍線部(2)はどのようなことか、説明せよ。

問三 最後の段落の「それ」とはどのようなものか、「分類の基準」と関わらせて説明せよ。

白
紙

次の文を読んで、後の問に答えよ。(二〇点)

①

同じ人の説の、このことかしことゆきちがひてひとしからざるは、いづれによるべきぞとまどはしくて、大かたその人の説、すべてうきたるここのせらるる。そは一わたりはざる事なれども、なほさしもあらず。はじめより終はりまで説のかはれる事なきは、なかなかをかしからぬかたもあるぞかし。はじめに定めおきつる事の、ほどへて後にまた異なるよき考への出で来るは、つねにある事なれば、はじめとかはれる事あるこそよけれ。年をへて学問すすみゆけば、説は必ずかはらでかなはず。またおのがはじめの誤りを後にしりながらは、つつみかくさできよく改めたるも、いとよき事なり。殊にわが古学の道は近きほどよりひらけそめつる事なれば、すみやかにことごとくは考へつくすべきにあらざる。人をへ年をへてこそ、つきつきに明らかにはなりゆくべきわざなれば、一人の説の中にもさきなると後なると異なる事は、もとよりあらではえあらぬわざなり。そは一人の生のかぎりのほどにも、つきつきに明らかになりゆくなり。さればそのさきとの後との中には、後の方をぞその人のさだまれる説とはすべかりける。但しまた、みづからこそはじめのをばわろしと思ひて改めつれ、また後に人の見るには、なほはじめのかたよろしくて後のはなかなかにわるきもなきにあらざれば、とにかくにえらびは見む人の心になむ。

(本居宣長「玉勝間」より)

注(*)

古学Ⅱ国学、日本の古典を研究して古代の精神を明らかにしようとする学問。

問一 傍線部(1)を現代語訳せよ。

問二 傍線部(2)のようにいうのはなぜか、説明せよ。

問三 傍線部(3)はどのようなことか、説明せよ。

問四 傍線部(4)の「スー」で替わらざるを。

